



# 新説：白鳥の騎士

## 第1話

戴冠式の朝がやってきた。

この日タレスワイン王国の王位を継ぐのは若き女性であった。

冬の夜明け前、霧に包まれた王都。

空では星がまだ瞬き、東の地平だけがわずかに白く染まって太陽の訪れを告げている。

針のように建つ王城、そして教院。

国全体が静けさの中に興奮を隠していた。

赫秘堂。儀礼を行う、タレスワイン王国内で最も神聖な場所だ。

そこで王に冠を授け、玉座に座るその瞬間を見守るのは教院の頂点に立つ至高典礼官である。

彼は王に神の教えを説き、時には政治に意見し、王と王国、国民を守り導く役目を担っている。

先代から仕える彼はすでに真っ白な頭髪の齢となったが、今でも細い身体はしゃんと背が伸び、濃い青の目は知性に輝いている。

宝石をちりばめた冠、真っ白な頭巾とマントに身を包んだ彼は杖を持って玉座の隣に立ち、女王が彼の前で立ち止まってわずかに身をかがめると、侍従が持っていた王冠を手に持って天に捧げるようとした。

窓ガラスの向こうから日の光が差し込み、王冠の金飾りがきらめく。

至高典礼官は王冠を捧げ持ち、莊厳な声で祝福の文句を唱える。

——胸に響くような声だ、とても滑らかで、歌のように身体に流れ込む。

女王はまばたきをしながらさりげなく周囲を見渡した。

誰もが目を閉じて、至高典礼官の歌のような祝福の文句を聴いている。中には涙する者もいた。

(父上と母上がお亡くなりになってから、まだ日は経っていないのに……)

不慮の事故で亡くなった父と母。

それから1か月だ、いつまでも喪に服して玉座を空けているわけにはいかないものの、ここまでお祝いムードで良いのだろうか？

それに、まだ若い女王は自分に王という職務が務まるか不安を感じないわけではなかった。

しかし誰もが皆、口をそろえて言うのだ。

——至高典礼官様のおっしゃる事を聞いて慣例に従えば問題ありません。

と……。

王冠の重みが頭にのしかかり、女王は思考を止めてゆっくりと顔を上げる。

至高典礼官の目と合った。

しわの多い顔だが、肌は艶めいて目は宝石にも負けないほどの霸気がある。

「…忘れるな、陛下。この冠は、あなたのものではない」

「え……？」

あまりに低く、どこか軽蔑すら感じさせる声音に女王は一瞬だけ眉を跳ね上げた。

どういう意味かと問う前に、群衆の歓声が響く。

「女王陛下、万歳！」

至高典礼官の手が王冠に乗せられ、わずかに女王の額に押し付けるようにした。

「……神がおわすことをお忘れなきよう。あなたが何もかも背負う必要はありません。哀れな魂よ、信じさえすれば、それで良いのです」

色とりどりのドライフラワーの雨がふる。そして民衆の歓喜の声も……。

「新たな女王がお生まれになった」

「見て、あの美しさ。まるで神に仕える聖女のように」

「素晴らしい、神の祝福を受けた正真正銘の聖女王だ」

「我らが女王陛下」

「万歳！」

女王は玉座に座りながら、それを他人事のように感じていた。

その日の昼にパレードの準備が整い、赫秘堂を出て馬車に乗って王都を巡る。

向かうのは東の街・エオステルヴェンだ。

ここは初代の王が森に水源を発見し、ここに王国を建てることに決めた街である。

元は王城があった王都、王国と王家にとっての聖域だったのだが、いつの間にか遷都され半ば森に飲まれた形になった。

住民は減り、野生動物の出没とそれによる被害が報告されているため兵士が駐屯している。

王都から数時間で着くためその日の内にここへ報告に向かい、一晩過ごすのが慣例。

女王は街道を進みながら、まだまだ寒い初春の風に髪をなびかせたのだった。

窓を開けて見える森はまだ雪をかぶっているものの緑は濃く、健康的である。

そこに犬がいた。

耳をぴんと起てた大型犬だ。茶色の毛は短毛で、しっぽがくるんと巻いている。

目が合った。

犬は女王を追うように雪を踏んで並走している。

女王は身を乗り出し、それを見て——気が付いた。

(こんな寒い日なのに、あの仔の息は白くないわ……)

だがやがて馬車の速さに追いつけなくなったのか、犬は失速し、馬車の後ろに出てただこちらを見送るだけになった。

墓に参って王位を継いだ報告を終え、王家が使う宮へ入る。

侍女のフィオナは寝床を整え、足元に温めた石を入れた。

「もうすぐ春になりますね。花が咲いたら婚約だとどこも喜ばしい雰囲気に満ちております」

「婚約？私は聞いていません」

「ですが女王陛下、王家を成しませんと。こればかりは喫緊の要事ですわ。出来れば二人以上が望ましいと。ですからお若い内に、と」

「確かにそうですが……」

「王女時代に婚約者がいても良かったくらいなのです。女王陛下のお年なら民衆の間ならそわそわし始める頃ですよ」

二人以上の出産となれば、出来るだけ早くと思うものだろう。

「フィオナも早く結婚したい？」

「出来ることなら。陛下と王家の方々に十分な恩返しが済んでからでも良いのですが……」

フィオナは口をつぐむと周囲を見渡す。

廊下に人の声が聞こえていたが、侍女たちのものだ、すぐに遠ざかる。

「……毎年入る近衛騎士たちの中には、侍女と通じる者もいるのです」

「それがどうかしたのですか？」

「もう、女王陛下！……良いですか、教院の教えでは結婚した男女でないと”通じる”のは罪なのです。子供を作る以外でそんなはしたないこと、許されませんからね。だから何人かの侍女と、騎士はそっと宮を去るのですわ。……私の婚期は遅れるかも」

「……そういうことね。フィオナ、あなたは優秀だわ。とても頼りにしています。でも、確かにあなたにも暇が必要ですね」

「はい。おそばでお仕えしたいのですが、実家に良い報告もしたいのです。……陛下が頼れるお方がいらっしゃれば……私たちの心配ごとは一つ消えます」

「王家を成すのは大事ですから、さすがに私も結婚の重要性はわかっています」

「それを聞いて安心しました。女王陛下はどのような方をお望みですか？」

「望み……」

望んで良いのかしら？教院が認めなければ誰だって無理でしょう。

そんな言葉を飲み込み、女王は曖昧に笑った。

「誠実な方なら嬉しい」

フィオナが退室し、女王は部屋に一人となった。

部屋の向こうには寝ずの番をする侍女と近衛騎士が控えているものの、慣れない暗い室内だ。

白い天蓋は外界を遮断する。いつもの部屋ならそれが嬉しいが、この日は別だった。

天蓋をまくり、毛皮のコートを着てベッドから降りる。

足が冷えるのを構わずに窓によって外を見る。

王冠の重みがまだ頭に残っている感じがした。それに、結婚。……目まぐるしく日常が変わっていく。意志とは関係ないところで。

ふう、と息を吐いて窓辺に腰かけた。

外は暗いものと思っていたが、そうではなかった。

月明りで影すら見えている。

(こんな時期に、明るい夜なんてあるかしら)

そう思ったもののどこか温かい光にもすら感じられる。

森の方まで視線をやれば、そこに犬がいた。

「あっ……」

先ほど、馬車を追っていた犬ではないか。

目が合うと犬はくるくると回って背を向け、女王を誘うように振り返る。

こんな夜に、出歩くの？

しかしあの犬を追わなければならぬ——もしかしたらこれは一種の現実逃避かもしれないが、女王は反射的に窓を開いて身を乗り出し、犬の元へ向かったのだった。

外は満月、それに満天の星々だ。

(満月なら星は見えなくなるものなのに)

女王はかつて”彼女”に教わったことを思い出した。

犬は女王が来るとしっぽを振って、道を示すようにゆっくりと歩き出す。

雪に出来る足跡は女王のものだけ。

「あなたは一体……？」

と声をかけるが、犬は振り返らずただ森の奥へ進んでいく。

葉を残したままの樹々が作る道を進めば、雪はあるが冷たさを感じなくなっていく。

(夢……?)

夢なら納得できる。

だが自分の吐く息は白く、空気の味を感じている。

星と月が樹々の間から光を届けている中をしばらく進むと、犬が一気に駆け出し、開けた場所に立つ巨木の前で止まった。

「ああ、やっと来られたのですね」

老婆の声だ。

うろから声の主は現れた。

ボロボロの灰色のローブを身に纏い、じゃれつく犬を撫でている。

「あなたは……」

「お懐かしい。あの頃はまだほんの小さなお姫様でした」

女王はゆっくりと近づいた。

背の曲がったために自分の身長の半分ほどの老婆。

「……おばあ様、私のことを知っているのですか？」

「もちろん、もちろんですよ。あなたがお生まれになった時から存じていますとも」

老婆の細い、枯れ枝のような指が女王の手に触れる——その瞬間、女王は息を飲んだ。

そうだ、彼女に、たくさんのこととを教わったのだ。

星の読み方、薬草の煎じ方、詩の読み方……だがどれも中途半端に終わってしまった。

怖くなったのだ、何かを迫られて……。

「おばあ様、なぜここに……」

「私はもはやここにしか住めなくなったのです。ですが幸いでした。あなたがここに来られた……これは素晴らしい兆しです。さあ、女王陛下。こちらにおいでなさい。私からも祝福を授けましょう」

老婆は顔を明るくして笑い、女王を手招いた。

うろのある樹を抜け、さらに奥へ。

そこにある石を積んで建てられた小屋に案内され、お茶を出されると女王は疑うことなくそれを口にする。

温められて香りを放つ花のお茶だ。すぐに息が楽になり、身体はぽかぽかと温かくなる。

「懐かしい味です」

「思い出されたので？」

「わざかですが……夢を見るので、それをおばあ様に相談したものでしたね」

「そう、そうです。あなたは星が去ってしまう、と泣いておられました」

「星が……」

そんな夢を見ていたらどうか？だがそれが頭によぎった瞬間、ちりちりと痛む感じがした。

「思いだしたのは全てではなくて……」

「それでも大丈夫ですよ、今はまだ。さあ、これを」

老婆は白いヴェールを差し出した。繊細な滑らかな糸で織られ、薄く透ける布に、星のようにきらめく石のようなものが織り込まれている。触れると適度にハリがあり、広げると霞のよう。

こんな美しい仕上がりのものを、献上品でも見たことはない。

「お茶は飲みましたね。なら大丈夫、服を脱ぎ、それを纏って川に行きなさい。身体を洗い清めて水源に行けばそこで祝福を授かるでしょう。あなたを守護してくれるはず」

老婆に導かれるまま服を脱ぎ、素裸になるとヴェールを纏う。

身体にしみ込むような不思議な感触だ。軽いのに存在感があり、とても心地いい。

「さあ、これで身体を清めなさい」

老婆は最後に小さな袋を手渡した。

女王はそれを持ち、再び犬に導かれてさらに森の奥へ歩いていく。

白い雪の世界にも関わらず身体は温かく、犬以外に動物の気配もない。

どこからともなく女性の歌声のようなものが聞こえるが、潮風の通る音だと誰かがささやく。

「これは夢なの？」

隣を歩く犬に訊けば、犬は小首を傾げて女王を見た。可愛いしぐさについ笑みがこぼれる。

「夢ね。あなたの足跡も残らない」

しかし女王の足跡はしっかりと雪に残っている。

寒さを忘れたままたどり着いた川に手を入れ、滑らかな手触りを楽しむように肩に撫でつける。

老婆が手渡した袋の中身は真っ白な……

「これは塩？」

試しに少しだけ舐めてみれば、海を舐めたようにしょっぱい。

「これで身体を清めるの？」

犬に訊くと、頷いた。

手から腕、肩、首、背中に胸、腹に足、と全体になじませるようにして身体を洗い、川に入って清める。

そのまま水源を目指して川を遡上すれば泡の立つ泉につながった。

木々の間に漂う淡い霧。鳥の羽のような雪が舞う。泉を守るように樹々の枝は広がって、月と星の光を水面にうつしている。

岩が点在しているため、さらに奥へ進めそうだ。

ざぶざぶと泉を泳いで岩へ渡り、濡れた髪をしぼって水気を切る。

ヴェールは水を含んでもすぐに乾き、風のように広がって重みがない。

犬が進むのを追いかけ、たどり着いたのは岩場から滴る水を受け止める、岩のくぼみだった。

ぴちょん、ぴちょん、と規則正しく水滴の落ちる音が耳に響く。

女王がくぼみを覗き込むと、そこにはいつもより明るく目を開く自分自身の顔が映りこんだ——

「……！」

その瞬間、アルヴァーンは息を飲んだ。

暗い異界の泉に立っていた彼は白銀の髪を緩やかな風に流し、目の前に映りこんだ女性……女王の顔にそっと手を伸ばす。

向こうからこちらは見えていない。

この泉はマジックミラーのように、異界の様子を映す水鏡だからだ。

——あの森の奥、彼女が守る最後の聖域に、女王がついに現れたのだ。

「……見つけた」

アルヴァーンは水鏡の女王の頬にそっと触れ、ほっと息を吐くと身を翻した。

向かった先は真っ白な壁の城である。

ここには無限の癒しの力を持つ宝物が祀られ、騎士たちは永遠の守護を誓っている。

そしてその城の主にして騎士王こそ、アルヴァーンの父である。

星の海を見渡す回廊に立つ彼の背にアルヴァーンは告げた。

「あの世界に、私の伴侶がおります」

「……あの世界は今混沌としている」

「だからこそ誰かが行かねばならぬと、先日も話し合っていたではありませんか？」

「そうだ。だが、今は未来のために種を植えることしか出来ないだろう。お前もまた、名を明かせば肉体を保つことは出来なくなるぞ」

「わかっております」

アルヴァーンは騎士王の隣に立った。

ゆったりと動く星々を見ながら、アルヴァーンはゆるゆると息を吐きだす。

「彼女を放っておくことは出来ません。いるべきではない場所にいるのです。ですが、それすら必要なことだったのなら……」

「ああ……これほどの好機もない」

騎士王はゆっくりと振り返る。

「何が潜んでいるかわからないほどに、影は濃くなっている。聖域は狭くなり、一部は破壊され、汚され、働きが鈍くなっているのだ。お前も制約を受けるだろう。だがお前の伴侶がそこにいるのなら、他の騎士より適任だ。取り込まれぬように、彼女たちを守れるように」

アルヴァーンと騎士王は黄金に輝く満月を見た。

「……もうじき星がお前の出立を告げるだろう。準備を」

「はい」

## 第2話

朝陽を浴びてとろけるようにきらめく緑の宝玉。

血のように赤い宝玉。

星のように白く輝く宝玉。

それらを嵌めこまれ、金で表を塗られた冠は、十本の剣先のような尖塔を天へと突き上げる。

燃え立つようなその形、赫秘堂の祭壇に祀られると、香の煙に揺れてますます幻惑的な炎と化した。

金には紫の花が掘られ、彩色され、見るほどに美しい。

王の冠よりもよほど豪奢なそれは、かつて野蛮な存在からこの王国を救った神と、神とともに歩んだ騎士たちに授けられるに相応しいものだ。

これをかぶることが許されるのは厳しい修行に耐え抜き、人々を導く知恵と慈愛を兼ね備えた人物のみである。

至高典礼官という肩書を頂いた人物だけなのだ。

彼は冠をかぶると、深く息を吐きだし目を閉じる。これほど甘く身体が泡立つほどの感動は、冠から与えられる以外で味わったことがない。その重みですら恐ろしさと同時に深い敬意と愛情、何よ

り自尊心を満たしてくれる。

「至高典礼官様」

若い女性の声に目を開ける。

冠を置いて振り返れば、深紅の毛氈の敷かれた階段の下、女王のそば仕えの侍女であるフィオナがそこに立っていた。

「お前か。女王のご様子はいかがであった？」

「はい。婚約に異存はない、と。お子様を産むことに迷いもないようでした」

「ならば婚約者を選ばねばな。女王陛下に相応しく、この王国を守って行ける勇敢な者を……」

「異国からの殿方も？」

「そうだな。我が国を守る教え……”燃ゆる曙光の教義”に学んだ者ならば。候補者は？」

「25名ほど……」

「ずいぶん多いのだな。女王が見目麗しいと聞きつけたか」

フィオナは曖昧に頷いた。

「下心のある者は陛下にとっても害悪だ」

「もちろんです。この王国は神と神の騎士たちが血を流して救ってくださった聖教国。この毛氈がそれを表している……陛下も、私たちも、燃ゆる曙光の教義にこそ守られているのです。その内容を知らぬ者は除外すると聞いておりますゆえ、ご安心くださいませ」

「ああ。お前は素晴らしい教え子だ。必ず神もお褒め下さるだろう。ところで、お前は神にその名を賜ってから何年が経った？」

「15年です」

「そうか。ならお前もまた相応しい者と結ばれる頃だな……」

フィオナの目が見開かれた。一瞬頬が緩んだように見えたが、すぐにうつむいてしまう。

「神への愛はどうなるのでしょうか？私は夫と、神と、両方を愛せるでしょうか？」

至高典礼官は彼女の不安を知ると、肩を抱いて声をかける。

「夫への愛は神への愛だ。神は二つの愛を分け隔てられるお方ではない、夫と結ばれるその瞬間、お前は神の御腕に抱かれているのだ」

泉の水が一筋、川へ流れ落ちる音だけが響く。

その中に聞き覚えのある声が響き始めた。

——誰かを貶めることを、美しい言葉で飾る者を信じてはならぬ。  
外見ばかり飾り立てる者を、すぐに美しいと決めつけてはならぬ。  
美は内より滲み出るもの、眞実は魂から発せられるもの。甘さと優しさは違う。  
子を育てる父母は、時に厳しい言葉を投げねばならぬように。

老婆の声だ。そばにいるのではと思うほどはっきりとした声。

目が覚めるとそこは天蓋に囲まれた宮の寝室だった。

(……おばあ様と再会したのは夢だったの？)

視線を巡らせるが、室内はきれいに整えられたまま。窓もちゃんと閉じられ、外に出た形跡はない。

夢だったのか……と思い身体を起こすと、肩を覆っていた布が滑り落ちた。

老婆から渡された、あのヴェールだった。

「……夢じゃない……」

エオステルヴェンから王都へ戻り一週間が経つ。この日は赫秘堂で行われる裁判があるのだ。

完全武装の騎士たちが守る物々しい雰囲気の中、また逮捕された罪人たちが赫秘堂の中へ連れられて行く。列をなす民衆は彼らに水をふりかけていた……清めのためだ。

「また逮捕者が？何をしたのですか？」

女王がそばにいた僧侶に訊くと、彼は恐れ多いとばかりに背を丸めて頭を下げる。

「法に背いたのです」

「何の法です？とても危険人物には見えません」

香りの強い香の中を歩いていく罪人達はこれ以上なく身を縮め、眉を下げて今にも泣きそうだ。みな若かった。

「定められた職を外れたのです」

女王は僧侶を振り返った。

「重要な犯罪ではありません。ここまでしなくても良いのではありませんか？」

まるで見せしめである。縄でしばられ、身体には拷問のあとが残っている。

「罪に大小はないのです」

「言い方をえます。罪ではありません。職業は適切なものから自由に選んでよい、と王国の古い法律があります」

「陛下、古い法律には穴があるものです。”燃ゆる曙光の教義”は騎士団とともに我々をお救い下さった新たな神の法なのですよ」

フィオナがやや厳しく言い、続けた。

「國中犯罪者だらけです。中には地下に潜伏して王国に反旗を翻そうともくろむ一団もいるとか」

「それはただの噂だったでしょう？きちんと調べたはずですよ」

「なんであれ騎士団にはもっと働いてもらわねばなりません。人数を増やしてはいかがでしょうか？」

次の罪人達が入ってきた。

「次に、密通の疑いにより……」

「ああ、王城で働いていた者ですわ。結婚が決まっていたのに、異国から来た騎士と知り合って……」

フィオナが示す先にいたのは、女王も顔を知っている若い女性だった。今が花と言わんばかりの輝かしい少女だったことを覚えている。

「こうなれば騎士も自国出身者を選ばねばなりません」

背後からそう声をかけてきたのは至高典礼官である。

今日はあの宝石をちりばめた冠とともに白い頭巾、マントまで身につけて、即位の礼以来の正装である。

「教義を守る者こそ騎士に相応しいのです。国どころか一人の女性の将来を危険にさらすなど」

至高典礼官はそう言い放つと深紅の本を手に持ち、杖について祭壇へ向かった。

彼が席に座ると、集まっていた民衆、僧侶たちがほうっと息をついた。まるで憧れの人を見るようなまなざしである。

フィオナもまた乙女のように両手を胸の前で組んで彼を見ている。

女王はこの中で誰よりも美しい衣装を身に纏い、背に神像を隠すようにして人々を見下ろす位置にある玉座のような椅子に座る至高典礼官を見た。

「哀れな者たちよ。一時の気の迷いならすぐに神が許すでしょう。定められた法は国とあなた方を守るためのもの、決してその心を踏みにじるものではありません」

民衆の中には涙をぬぐう者もいた。罪人の家族のようだ。

「神と私に従いなさい、ただ信じ、無用な疑いは捨てなさい。信じる先にある理想郷へ私こそが連れて行ってあげましょう」

至高典礼官の言葉に合わせて祭壇の炎がまるで応えるように揺らぎ、彼の手から零れる砂金の光が罪人と家族の上に降り注いだ。

人々は「なんとありがたいんだ」「なんと高貴な姿だろう」と酔った人のような目で見つめている。

「あなたたちは脆い。あなたたちは哀れ。私と神がいつでも見守っていますよ。あなた達の罪は夜の間に赦されます」

「ありがとうございます……！」

至高典礼官の冠が、夕日に照らされ光った。

(一体何だったのかしら……)

寝台の上で何度も分からぬ寝返りを打つ。

民衆の酔った瞳が焼き付いて離れない。誰もが嬉々として鎖に繋がれるような光景に、胸がむかつくほどの嫌悪と恐怖が込み上げてくる。

教院はかつて、野蛮な魔物に支配されていたこの王国を救った聖なる騎士団が造った組織である。

彼らは”燃ゆる曙光の教義”を記した本を持ち、剣と槍とで森を切り開いてその奥に潜んでいた魔物を討ったのだという。

それ以来国王の信を得てお堂を次々に建て、周辺諸国へも教えを広め、その教えのもと王に次ぐ権力を手にしたのである。

その頂点に立つ至高典礼官は、王冠よりもまばゆい冠をかぶることを許され、赫秘堂においての儀式、裁判、王家の婚姻、時には戦争など国事に関わる。——女王は異国から船に乗りやってきた商人たちが噂しているのを聞いたことがある。

この国は王ではなく教義に統治されている、と……。

「……はあ……」

王家とは、子を成し、王家を存続させ、教義を守り続けるための存在。

うすうす気が付いていた。

眠れないのならいっそのこと、と身体を起こして窓へ寄る。空を見れば星がきらめいていた。それにとても慰められる。

——星が去ってしまう、と

老婆の言葉を思い出した。

そんな悩みを打ち明けたのか……よくは思い出せないが、それは間違いないのだろうと心の奥が告げている。

なぜなら女王は時々、こうして夜空を見ては星を見つけ、「もうすぐあの花が咲く、もうすぐ収穫の季節が来る」と読んでいるからだ。

「星が……去る」

なんだか切ない響きだ。老婆のもとでそう話し、泣いたのだろうか。

つぶやいた瞬間、紐が解かれるようにして老婆の声が頭に蘇ってくる。

——あなたは地上の門なのです。

「地上の門……」

その意味すら分からぬまま声に出し、胸のあたりを撫でる。

「もうすぐあの星が……来る」

そして眠りにつき、女王はあのヴェールの上をひたすら走ってあの森にたどり着く。

これは夢だと自覚したままに、老婆を訪ねれば彼女は女王の訪れを知っていたかのように頷いた。

「おばあ様……なぜ私たちはこんなことに？」

女王が言いたかったのは赫秘堂での裁判……ではなく、そこで目にした民衆の様子だった。なぜか、とても恐ろしく感じたのだ。

老婆は女王の言いたいことが分かったのか、寂し気にうつむくとただ一言、床に落とすように呴いたのだった。

「土地の声を忘れたからです。祖先から受け継ぐはずの知恵が絶たれた時、人は外から与えられる鎖にすがるしかなくなるのです」

「それは……一体？」

「あなたも思い出さなければなりません。……かつてこの王国は緑にあふれ、花々が咲きあふれ、人々は夢を持ち、語り、交わる豊かな国だったのです」

「ここが？」

治安が悪いため王家の騎士と教院の騎士たちが常に巡回しており、国内は常にものものしい空気が漂っている。

その中で救いを求めて教院にすがらざるをえず、その教えに従わなければ罪は晴れない。

人々は王法よりも教院の定めた法に厳格にしたがうことが求められ、夢を持つ者は危険であり、異国と不用意に交われば逮捕される。

自然は遠ざかり、灰色の針のような建物だらけで、一年中もやに包まれているような錯覚すら覚えるほどだ。

そう、かつては異国との交流も盛んだったと女王も聞いていた、だが……

老婆は顔をあげ、女王を見つめると目を細めて微笑んだ。

「女王よ、もうすぐ白鳥の騎士がやってきますよ。彼こそがあなたへの祝福なのです……だからそれまで、待つのですよ」

老婆の言葉に、女王の胸は不思議な期待と恐れで高鳴った。

「異国との貿易を再開するのはどうでしょう？我が国からも留学生を出し、海の向こうの土地と交流を深めていくのです。若者にとっては良い刺激になるでしょうし、仕事も増えます」

女王は早速提案したが、重臣たちは顎に手を当てて考えるそぶりを見せるばかりだった。

「この国の状態で貿易すれば、あっという間に飲み込まれるでしょう。農家の息子は家を飛び出る始末ですよ、留学生を出せばこれ幸いと国外逃亡されてしまいます」

重臣たちの長といえる存在のダンカンはそう言った。

他の重臣たちも次々口を開く。

「野蛮人が押し寄せれば秩序は乱れます。冬のせいで蓄えが減った今、商人を泊まらせる宿とて機能しません」

「それよりも今、逮捕者が続出しているのが厄介ですなあ。家を継げば良いだけなのに、一体何が不満だというのか」

「密通も理解できませんね。中には駆け落ちを誓ったから、と至高典礼官様の砂金を受け取らず牢屋で過ごしている者もいるとか」

砂金を受け取れば罪は消え、家に帰れるのだ。ところが、少ないとはいえ何人かはそれを拒んで牢にい続けている。この寒さで石造りの牢にいれば、命の危険があるのではないか……女王は胸のあたりをぎゅっと掴んだ。

(このままではいけないわ……)

だがどうすれば良いのかわからない。王冠が頭を締め付け、吐き気がするほどの頭痛に見舞われた。

「女王陛下、あなたはまだ即位して日が浅いのです。王国を思ってのご提案はとても素晴らしいことです、今しばらくは我々を信じ、頼って下さい。ご結婚もされていない今根を詰めれば、お体に障りますよ」

ダンカンの頼もし気な一言に、頷いてはいけない……そう思いながらも、頭は突然重くなり、顎を下げる形になってしまった。

「それで良いのです。大丈夫、陛下が全て背負われる必要はありません。我々と教院が常にお側におりますゆえ。そうそう、ご結婚の話を進めなければなりませんな……」

「喜ばしいことです。どのような方が相応しいか……」

「あの国の大臣の子なら教義を深く理解しており……」

「ダンカン様のご子息なら容姿端麗、年齢も陛下と近く……」

彼らの声が遠のいていく。

これは一体どうしたことか、と考えることが苦しくなるほど、頭痛は激しさを増していった。

気づけば夜を迎え、眠りにつく。王冠を外し、老婆から譲られたヴェールを肩に覆っていると深く眠りにつける。

女王は夢を見た。

星の海の中、白鳥とともにやってくる騎士の夢だ。

穏やかな海のように波打つ銀の髪、白銀の鎧を身につけ、角笛と剣を腰に佩いて、白鳥が曳く船に乗り女王のもとへやってくるのだ。

彼は女王をまっすぐに見つめ、こう言う。

「私を夫と望まれるなら……を……てはなりません」

「ええ、その通りに……」

という自分の声で目が覚めた。

驚いて目を見開くと、カーテンの隙間から朝陽が差し込んでいるのが見えた。

春を告げる小鳥が近くの樹に止まり、尾をふっている。

(懐かしい夢だわ。でも……彼の顔を見たのは初めて)

凜々しく、知性と情熱が共存する顔立ちだった。胸のあたりがじわじわ温かい。体中に心地よい熱を灯されたようで、自分でも気づかぬうちに鼻歌を歌う。

(もうすぐ”星”が来る頃ですもの)

と、突然自分の声なのに自分のものではないような言葉が浮かんだ。

侍女たちがやってきて朝の支度を手伝い始める。

フィオナは女王の髪を整えながら、「あら？」と鏡越しに顔を覗き込んできた。

「なんだか熟れたりんごのように頬が染まっておりますね」

「そうですか？」

「ええ。新妻のようですわ。きっとご結婚のお話が進んだからですね」

「まだその話が出ただけですよ」

「お祝い事が進むのはあつという間なのです。私も早く王子様かお姫様のお世話をしたいものです」

フィオナの一言に女王は額をかいたが、話が進むのは本当に早いものだった。

至高典礼官も重臣たちと話し合ったらしい。女王の結婚を最優先で整えるよう、と決まったのである。

女王のもとにはいくつもの肖像画が送られ、一人一人説明される。

その中に夢で見た「彼」の姿はなく、女王は胸がしほむのを感じた。

(夢は夢……)

だけど忘れられない。

自分を見つめる、あの誠実な光を宿した瞳を。

「形だけでも婚約を」

至高典礼官がそう言い、女王ははっと息を飲んで顔をあげた。

「婚約ですか？」

「はい。このままでは婚約者は後を絶たず、断り続ければ国難に繋がる恐れもあります。隣国の王子も、北の海の商人も、みな条件は良いのですが決定打に欠ける。私はダンカン殿のご子息・ターロウ殿が相応しいと存じますが」

女王はダンカンを見た。黒々とした髪で、かつて騎士団とともに国を守る将軍職も務めた彼の息子・ターロウは、ダンカンと似た高身長で、才気煥発、容姿端麗と侍女や庶民の女性からも憧れの対象となっている。だが彼は長男であり、他は娘しかいない。女王と結ばれれば家はどうなるのだろう？

「……そうなれば私どもにとっては恐悦至極に存じます」

「えっ、な、なりません。あなた方の家名を絶やしてはいけません」

「婿を取れば良いだけです。女王陛下のご心配には及びません」

「ですが……しかし……ターロウ殿なら相応しい女性がたくさんいらっしゃるでしょう。美しく、教養もあり、健康で、妻の務めを果たせる女性とともに暮しになった方が……」

「女王陛下をお支えすることは、この国の者にとって最大の誉れ。拒む理由などありますか？至高典礼官殿に認められたなら神に認められたも同然。なによりこの国で最も尊く、気高く、身も心もお美しいのは女王陛下以外おりません」

「そうですとも。即位式で誰もが女王陛下を聖女王と。婚約するだけで国を守れるのですよ、何を迷うことがありますか？ターロウ殿ではご不満でも？」

至高典礼官が身を乗り出した。

決して受け入れてはいけない。女王はやはり襲ってきた頭痛に耐えながら、何とか言葉にした。

「…………夢を見ました。神が遣わした、私の夫となる人の夢を。白鳥の曳く船に乗り、星とともに現れるのです。夏が来る前にその人が現れねば……その時は、あなた方の言う通りにいたしましょう」

続く。

続きはこちらで。My Patreon→ <https://www.patreon.com/cw/MArcturus>

どんな物語か？こちらをどうぞ。→ ㊣自分の名を失わずに生きるための物語。